

発行：高齢者年NGO連絡協議会事務局

〒140-0004東京都品川区南品川5-3-10-5F

TEL 03-5461-0839 FAX 03-5460-9820

高齢者の尊厳と自立

高連協代表 堀田 力

このたび皆さんの強い要請を受けて相原さんとともに高連協の代表に就任した。国連が国際高齢者年を設定したことは、21世紀の地球のあるべき姿を考えたとき、まことに意義深い。その活動を展開するために日本のNGO・NPOがこれだけ立ち上がったことは、画期的なことで、高齢化問題の先頭に立つべき日本が、ようやく世界に肩を並べることができたといえる。

人としての尊厳が基本

高齢者のための国連5原則のうち、私は「尊厳」が最も基本と考える。高齢者が若者や壮年者と同じように、人としての尊厳をもって生きられることがいちばん大切なことだ。そのために、3つの「自立」を強調したい。精神的自立があってこそ尊厳は生まれ、それを支えるために身体的自立と経済的自立とが必要と思う。

3つの自立

身体的自立を補助するのが、医療・保健や、介護などの福祉である。これらに関する社会的な仕組がどれだけでできているかが、尊厳ある生き方を保障するための基本であろう。よりよい取組みにするべく、我々は行政や立法府及び民間組織に向かって、声をあげ働きかけていきたい。

経済的自立の確保については、年金・就業・住宅など取組むべき課題がたくさんある。これまた我々が日常の活動の中から感じている要求や具体策などを、この際みんなで考え論じ合い、高連協としての提言に高めていくべきだと思う。

そして最も大切なのは精神的自立だ。高齢者自身が自らを大切に社会に参加する。そのふれあいの中から心の交流が生まれ、生きがいを感じ、自立の度合いが高まる。高齢者が高齢者だけで交わるのではなく、世代を越えた交流の場を作るため我々はもっと役割を果たすべきであろう。

国際高齢者年 1999



高齢者年は今年10月1日をもってすでにスタートした。我々がそれぞれの特徴を生かして活動を促進し、情報を交換し、結束・連携を強化することの意味は極めて大きい。

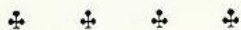
そして行政・立法府や、民間組織、さらに社会全体に働きかけを行なうとともに、世界に向けて発信し、国際的な情報交換と連帯の場を作っていきたい。

その際東南アジア諸国との連携が特に重要と思う。日本が高齢化先進国として東南アジアに伝えることのできる、あるいは交流できる経験と教訓はたくさんあるはずだ。そのことをとくに強調して私の就任の挨拶としたい。

相原代表NHKラジオ生出演

・・・高齢者年・高連協の発足につきインタビュー・・・

去る10月12日(月)午後6時よりの「NHKラジオタ刊」に相原代表が生出演、村田幸子解説委員より12分間の単独インタビューを受けた。対談は国際高齢者年の目的から高連協のめざす活動内容まで及び、よいPRの機会となった。ここにもう一度再現する。



<認知度低い国際高齢者年>

村田：来年1999年は、国連が定めた国際高齢者年。ここへ来て、日本の政府も民間も動き出しました。毎年10月1日は国際高齢者の日だからです。

今日はこの10月1日に結成されたばかりの「高齢者年NGO連絡協議会」相原代表をお招きして、お話をうかがいます。

ところで相原さん、世間ではあまり高齢者年を知らない方が多いようですが。

相原：確かに2～3年前の国際婦人年などに比べると、だいぶ違います。あの時は北京で大きな国際会議が開かれましたが、高齢者年は国連の事情もあって開かれませんでした。

村田：なるほど。そこで認知度を高めようと皆さんが立ち上がったわけですね。高連協と呼ぶそうですが、ここまで何団体加盟されていらっしゃるんですか。

相原：25団体が加盟し、あと数団体が準備中です。

<国際高齢者年のねらい>

村田：ところで国連は高齢者年にどのようなねらいを定めているのでしょうか。

相原：国連は今度のテーマを「すべての世代のための社会をめざして」としました。

そのねらいは2つあります。まず世界中に高齢化の認識を広めることです。

2つ目のねらいは高齢者のための国連原則つまり自立、参加、ケア、自己実現、尊厳の5つですが、これらの政策化や活動の具体化を図ることです。

村田：国連はそれぞれの国にそうしたことを求めてきているのですか。

相原：ええ。国連のメニューの一つとしては政府の中にフォーカルポイント、つまり担当部局を作り、そこが中心となって民間や地方自治体と一緒に国内委員会を組織し、政府のイニシアティブで進めるというものです。

村田：日本の場合、国の窓口は総務庁ということでしょうか。

相原：まだ決まっていません。多分そうなると思っていますが。

村田：まあいずれにしても、国連のテーマのねらいは、みんなが老いていくことを踏まえみんなが住みやすい社会を作ることではないでしょうか。

相原：そうですね。高齢者だけでなくみんな老いるのだから1999をスプリングボードにして、みんなで活動しようというのが国連のねらいだと考えています。

<高連協のめざすもの>

村田：その目的を実現するため立ち上がったのが今度の高連協と思いますが、今後どんなことをやっていこうとするのでしょうか。

相原：基本的には11月になって会員全体が集まって決めるということです。一概に高齢者団体といっても活動の中身はいろいろで、ともかく同じ土俵に上って考えようということなのです。

いままでのことを高齢者記念ということでやる団体もあるでしょう。あるいはセミナーやシンポジウムを企画していた団体同士が、共同でゆったり調整を図ったりするケースも出てくるでしょう。さらに、みんなで一つのテーマや目標を定め、それに向かって活動を展開することもあるでしょう。

それらの前提として情報センターが必要であるとの認識が一致してスタートしました。いずれにしても同じ志の団体が集まったばかりですから、11月にみんなで具体的な活動内容を論議することになっています。ようやく緒についたというところです。

<多様性を生かして具体的活動に>

相原：活動を進めるに当たっても、せっかくこういうのができたのだからがっちりやろうという考えもあれば、あまり入口を固くしてみんなが入りにくくなってはいけないという考えもあります。11月にこの点もみんなで論議していきたいと思います。

村田：私もやり方は画一的でないほうがよいと思いますが、それにしても従来の国際年に比べて、当事者意識というか、団体の動きが見えてきませんね。原因はなんでしょう。

相原：ここに来てまとまるまでにいろいろとあり、原因というか3つほどあります。

1つはお金の問題で、財団などはみな金利の低下と会員の減少などに苦しんでいます。2つ目は国際高齢者年はいってみれば横文字の世界だから自分には関係ないという誤った認識です。3つ目は政府の動きや指示を待つという考えです。

まあ、それはそれとして、ここまできたらまとまろう、走り出そうということでも我々高連協のスタートとなったわけです。

村田：やっとスタートについたわけですね。大事なテーマの実践に向け皆さんのご健闘をお祈りしています。本日はどうもありがとうございました。(完)



高連協役員 の 役割分担

10月1日の設立総会で決定した役員の担当が次のように決定しました。会員の皆さんのご協力をお願いいたします。

代表	堀田	相原
総括	久野木	和久井
総務	鷹野*	
広報	横田*	松見
国内	吉田*	山本 高木
海外	横田*	吉田
SA	若林	
監事	東瀧	若林

(注) SA=スペシャルアドバイザー
*=主担(メイン担当)

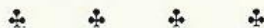
(注) 総括・主担・SAメンバーにて
運営グループを構成する。



高齢者年ロゴマークを活用ください

国連の設定したロゴマーク使用につきましては皆さんの関心も深く、総務庁や高連協にかなりの問い合わせがあります。また東京の国連広報センターも本件に深い関心を示しております。そこでこのほど相原代表が直接国連本部と交信の上、取扱について一定の結論を得ました。

つきましては、その要点を下記の通り案内致しますので、せいぜいご活用下さい。



- 1) このロゴマークを高連協の会員がイラスト（挿絵）や広報の目的で使用する場合には (for illustrative or information purpose) 国連への許可申請は不要です。高連協より国連に対して必要な手続きをとっております。どうぞ積極的にこのロゴマークを活用して、国際高齢者年をPRして下さい。なお各位が使用された場合は、参考までに高連協事務局または広報担当まで現物をご送付下さい。

（例）機関紙やニュースレターの表紙や記事のイラストとして使用する。

シンポジウムやセミナーのパンフレットやポスターに使用する。

- 2) それ以外の目的で使用する場合にはケースごとに個別に申請する必要があります。

その場合には、予め事務局または広報担当までご連絡下さい。

（例）募金活動の手段として使用する。

営利活動の手段として使用する。

以上



towards a society for all ages
International Year of Older Persons 1999

国際高齢者年 1999
すべての世代のための社会をめざして

発行：高齢者年NGO連絡協議会
事務局（鷹野・横田）

住所：〒140-0004

東京都品川区南品川

5-3-10-5F

TEL 03-5461-0839

FAX 03-5460-9820

堀田代表NHK国際放送に出演

・・・世界に向けて高齢者年と高連協を語る・・・

去る11月18日、第一回高連協定例会の開催に先立ち、堀田代表がNHK国際放送局のインタビューを受け、自らの高齢者年に関する思いや高連協代表としての抱負を存分に語った。インタビューは通訳なしの英語のみによって行なわれ、その12分間の内容は、11月24日、ラジオジャパンのネットワークで全世界に放送された。

インタビューの前半は、国際高齢者年や高齢者問題に関する質問が続き、それに対して堀田代表は、高齢者年のねらいがオールドエイジ(old age)だけでなくオールエージ(all ages)のための活動にあること、人生の長寿化によって人々が余生を楽しむという考え方から、より積極的に多面的な活動によって長くなった自らの高齢期を有意義に暮らしたいと考えていること、たくさんの若くて元気でエネルギッシュな高齢者層の出現によって、定年制のあり方の再検討やボランティア活動など、社会としての受け皿作りが必要であることなどがいきいきと語られた。

インタビューの後半は高連協に関する問題に質問が集中した。インタビュアーからこのたびNGOを統一(unify)しようとした理由を聞かれた堀田代表は、きっぱりとUNIFYという用語を否定し協議会としての性格を説明した上で、加入団体が自立的に活動を展開することを基本にその上にたって情報を交換し、セミナーやシンポジウムなど協力・協働できることを追求し、さらに海外特にアジアの国々に情報発信し交流していきたいと抱負を語った。

10月12日のNHKラジオタ刊による相原代表インタビューに続き、今回の堀田代表のラジオジャパン登場は国際高齢者年にふさわしい出来事といえる。それらはまた高連協が社会的に認知されつつあるあかしでもある。それだけに高連協の活動の早急な具体化と更なる仲間作り、政府・自治体との連携などが求められる。



高連協第1回定例会を開催

・・・まずはメンバーの活動状況を知り合うことに重点・・・

高連協の第一回定例会が11月18日開催された。10月1日の高連協設立総会の申し合わせにもとづき、当面は月に一度のペースで開催することとなったものである。当日は堀田代表の就任挨拶に引き続き、相原代表から設立後一か月半の主な動きについて報告があり、特に高齢者年ロゴマークの積極的な使用について要請がなされた。

続いて加盟団体の自己紹介が行なわれ、それぞれから高齢者年に対する抱負と高連協の運営に関する意見・要望が出された。さらにメンバー同士がお互いによく知り合い親しくなることが重要との認識から4団体の活動につき現状報告がなされた。次頁にその要点を紹介する。

(財) さわやか福祉財団

☆わが団体が目指すもの

人が生まれつき持っているやさしさを素直に出し合い、誰もが心豊かに暮らせる「新しいふれあい社会」の実現をめざしている。そのため地域単位で助け合えるシステムの構築を具体的に実践中。

☆アピールポイント

「公的介護保険とふれあい活動は車の両輪」たとえ家族を離れ一人になり身体が不自由になっても、最後まで安心して暮らせる社会。そのためには、一方で、在宅医療サービスや公的介護保険制度によるサービスがきちんと提供されること。他方で、給食や移送など公的サービスが提供しない生活支援の活動や、散歩に付き添ったり一緒に語らいながら食事をするなどの心の交流を図ること。ふれあい社会を実現するためには、公的介護保険とふれあい活動の両輪が必要と考える。そのため当財団では

1. 組織づくり支援作業
2. 社会参加システム推進事業
3. 広報・企画事業
4. ふれあい社会づくり事業
5. グループホーム推進事業

などを展開している。

☆高齢者年への取組

日本の高齢者が世界の高齢者に劣らず幸せに暮らせるよう世界に発信しながら、次のような運動を展開する。

1. 人としての尊厳を重んじ、精神的身体的経済的及び参加の自立をすすめる。
2. 社会の変革者としての元気な高齢者の社会参加、特に要支援者への福祉サービスの参加を促進する。
3. 高連協参加団体との連携実現。
4. 海外、特に東アジアとの交流。
5. 高齢社会構築に向けた全国キャンペーン

日本ウエルエージング協会

☆わが団体が目指すもの

高齢者は社会的弱者として常に底護の対象としてとらえられてきた。しかし「高齢者も人間である」という考えから、高齢者自らが「自立自助」に努め、孤独と無為に陥ることなく、社会参加できるような努力と工夫が必要である。このような基本理念のもと、四十数年にわたり高齢化問題に精力的に取り組んできた。

☆アピールポイント

1. 参加型小域よろずやセンター
「自立自助」実現のため、高齢者の集いの場として、参加型小域よろずやセンター（ウエルエージングセンター）の構想を推進中。
2. 「発明・工夫・デザインコンクール」
高齢者のためのコンクールを毎年開催して、高齢者の知的活動の刺激と世代間の交流を図るとともに高齢者のニーズを把握。
3. インスタントシニア（シニア体験）
カナダオンタリオ州政府から独占的ライセンスを受けて国内で唯一実施を認められ、中央官庁、地方自治体、社会福祉団体、企業等の要望に応じてプログラムを実施。
4. NGO
平成7年、我が国の高齢問題関係団体の中で初めて国連広報局NGOに承認された。
5. IFA
世界高齢者団体連盟（IFA）に加盟し世界の団体と接触。吉田会長はIFA理事。

☆高齢者年への取組

高齢問題は全体を統括的かつ一元的にとらえる必要がある。そのためには多くの高齢問題関連団体の連携協力が必要不可欠である。この国際高齢者年を契機に、協会がかねてより主張していた、「高齢者団体の大同団結」「高齢者パワーの結集」に向け、その一步を踏み出すことをめざしていきたい。

(社) 日本産業退職者協会

☆わが団体が目指すもの

日退協は、高齢退職者が「生きがい」を見い出せるよう「触媒」の役割を果たし、健康・教養・趣味等の同好会を結成し、各種会合を持ち、それぞれが自主的に活発な活動が続けて、高齢者の地位向上、福祉増進を図ることをめざしている。

☆アピールポイント

高齢者は、定年を迎え多年慣れた会社を離れた時、直後の解放感はずかの間に消え去り、地域における「根なし草」、都会砂漠に放り出された孤独感を皆等しく味あわされる。そこで思うのは、ほかの人達はどうしているのか、会って話してみたいということ。当協会はこのような「集まって本音で話し合いたい、本当の友人を作りたい。」との気持ちに応えようと8年前から「フリー・サロン」を開いている。

「フリー・サロン」は隔月第二火曜日に2時から5時迄開く。はじめの1時間は高齢者の関心事である健康・経済・趣味等に関する話を専門家から聞き、出席者を5組に分けて、お互いに顔見知りになれるよう、原則としてメンバーを固定している。終れば有志の仲間であって一歩も共にしている。この会合は好評で間もなく50回目を迎えるようとしている。昨年のテーマは「明るい社会を目指してわが世代を考える」。

☆高齢者年への取組

協会機関誌「マチュリティ」の特集号を出すのはもちろん、「フリー・サロン」ですでに格好の課題として話し合いを行なった。また協会のイベントグループがそれぞれに、例えば俳句会やカメラ同好会が高齢者をテーマにするとか高齢者問題を扱い、会員およびそ家族など皆で高齢者の在り方や社会的役割等をこの機会に考えることにしている。

(社) エイジング総合研究センター

人口の高齢化と社会変化に関する調査研究と広報活動を行なっているNGOの研究機関。

1985年設立以来、高齢化社会の観点から内外の統計データ収集や社会調査資料の集積（データ集、文献集、報告書）、ライフスタイルや高齢化社会変化に伴う新しい社会現象（居住、移動、社会行動など）の調査研究、などを行なうとともに、国連専門家会議（国連人口部共催、東アジア共催）、海外研究・研修、公開講座・シンポジウム、研究会などを定期的に開催している。

また一般向けには、高齢化社会情報誌「エイジング」を発刊している。

「Aging in Japan」や「Statistics of Aging Japan」などの海外向け情報提供書もある。

総務庁高齢社会対策室の所管法人であるが、補助金は受けず、高齢化社会変化を客観的に見つめ、資料やデータを社会に提供する役割を自認している。英米諸国には一般的にある非営利の研究機関だが日本では珍しく、特異な存在と見られている。

理事長は高本文雄。

〒102-0082千代田区一番町2-5ダイヤモンドビル

TEL 03-3265-2345 FAX 03-3221-6744

E-mail : aging@ask.ne.jp

URL : <http://www.ask.ne.jp/~aging/>

今後定例会にて、高連協メンバーの現状報告が順次行なわれます。高連協ニュースでは引き続き誌上でご紹介していきます。乞うご期待。



総務庁が続々と高齢者年企画を具体化

総務庁がなかなか元気だ。もともと総務庁は政府の中で高齢化問題の取りまとめ役的な立場にあり、平成8年7月の「高齢社会政策大綱」が同庁のとりまとめによって閣議決定されたことはご承知のとおり。日本政府の高齢者年に関する取組が開始された今年の3月以降、総務庁の取組が目立つ。その主なものを拾ってみると、

- * 7月 全国の自治体に対し、高齢者年を周知徹底すると共に活動の具体化を要請。
- * 9月 高齢者年をアピールするポスターとチラシを国連に先駆けて作成。
- * 10月 高齢者年のスタート(1日)に合わせ、各種高齢者団体に呼びかけて5日にキックオフ・ミーティングを開催(事前集約したイベントマップも配布)。10～11月にかけて全国6か所で「国民の集い」開催。
- * 12月 国際高齢者年記念シンポジウム開催(2日)
「高齢者の人権とコミュニティ・老人性痴呆を学際的・国際的に考える」
- * 12月 「国際高齢者年」におけるマスコット・キャラクター募集(締切は1月末)
更に新年以降の計画として
- * 1月 第11回世界青年の船における「国際高齢者年」記念世代間交流プログラム
(参加13か国、276名。高連協加盟団体より講師派遣)
- * 新年度 高齢者の社会参加活動や世代間交流に着目した事業を複数計画中。

高連協としても、総務庁や他の省庁、更には自治体とタイアップして共催し、支援し、情報交換するなどの活動も、大いに検討すべきといえよう。

☆PRコーナー

◆第15回よこはま21世紀フォーラム

「高齢者の働く場づくり・生きがいづくり」

主催：横浜市 横浜市立大学 *入場無料・同時通訳付き

1月21日(パシフィコ横浜)・22日(横浜シンポジア)

記念講演：曾野綾子「高齢者の任務」

パネル討論：「元気な高齢者～生産的社会参加」

「65歳現役社会にむけて」

問合せ先：TEL 045-787-2061 FAX 045-787-2351

◆PRコーナーを作りました。PRしたいものを、どしどし事務局までお寄せください。



発行：高齢者年NGO連絡協議会事務局(鷹野・横田)

住所：〒140-0004東京都品川区南品川5-3-10-5F

TEL03-5461-0839 FAX03-5460-9820

発行：高齢者年NGO連絡協議会事務局

住所：〒140-0004東京都品川区南品川5-3-10-5F

TEL03-5461-0839 FAX03-5460-9820

国際高齢者年の本番スタート

・・・マスコミや総務庁に本格的な動き・・・

☆正月の紙面にみるマスコミの動き

いよいよ国際高齢者年1999の幕開け。世界的に大きなうねりとなること祈りたい。この正月の全国紙の中から、目立った関連記事を拾ってみよう。

★ ★ ★

◆読売新聞◆

5日(火)に通年企画「人生回廊」と「超高齢時代」のダブル特集として見開き2頁の特集。高齢者年のロゴマークをカラーで、「高連協」堀田代表による特別寄稿を目玉の「囲み」にして両頁ともA3版を上回る大型編集。各国最新事情も大きく紹介。

♥朝日新聞♥

元旦の見開き2頁の紙面「21世紀私たちは」に、「さわやか福祉財団」堀田理事長が明石前国連事務次長と対談の主演として登場。一方のページには高齢者ボランティアを中心にNPOの重要性を指摘。併せて、この点に関する日本の後進性を指摘。

◆毎日新聞◆

元旦を期し、一面トップのシリーズ企画として「飛べニッポン第一部：高齢社会はこわくない」の連載を開始。有名なアメリカの「サンシティ」の最新事情を紹介すると共に日本のシニアタウンの例も併せて紹介。3日には「リバースモーゲージ」を紹介。

♣日経新聞♣

Monday Nikkeiを元旦(金)特別紙面として掲載。その「出番です」のサブタイトルを国際高齢者年とし高連協代表の「堀田弁護士」が登場。さらに「財産は自分のために」でニューフィフティーズの、子供に頼らず老後を楽しもうという新しい考えを紹介。

◆産経新聞◆

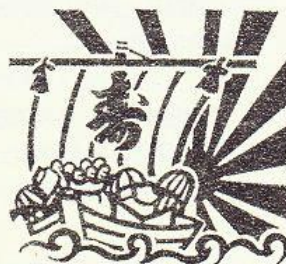
5日の朝刊トップ記事として、政府が「成年後見制度」法案を、この19日から始まる通常国会に提出する可能性のあることを報道。民法の禁治産制度を抜本的に見直して、平成12年度からの新制度スタートを目指すとしている。

☆総務庁がフォーカルポイントに

昨年末暮の21日、政府の省庁間連絡会議で総務庁がフォーカルポイント(国の責任窓口)となることが正式に決定された。

総務庁の活躍ぶりは前号で紹介したが、その後さらに

- * 国際高齢者年ニュースの発行(12・25創刊済)
- * 国際高齢者年記念切手の発行(10・1予定)
- * 中央・地方・民間・国連など国内外関係先との連携強化など多彩な取組を検討している。



全国新聞連合シニアライフ協議会

(財) 視覚障害者食生活改善協会

☆概 要

北海道新聞社など全国40の地方新聞と、共同通信・電通・講談社などメディア企業の合計45社で、平成2年、「高齢者の生きがいと健康づくり」に貢献する事業を研究、開発しようと発足。略称ANSEL。

高齢者向け情報の企画編集、福祉施設でのボランティア体験キャンペーン、「心にしみるいい話」の発刊、高齢者関係の各種調査・研究事業を展開している。

☆紙面報道の威力

メディアを通じて事業や調査結果を紙面で報道、広くアピールすることができるのが、一番の特徴である。

「阪神・淡路震災でのシニアボランティアの活動調査と育成支援」「長寿社会における世代間交流についての実証的研究」「介護体験を通じての三世代交流キャンペーン」などの活動を報道しており、特に、介護体験発表座談会の紙面報道は、新聞社組織ならではのアピールポイントといえる。

☆価値観の共有が基本

国際高齢者年への取組みとして「すべての世代のための社会をめざして」の標語を先取りして、「三世代介護体験キャンペーン」を平成9年から実施。その参加者はこれまでに24都道府県、2400人にのぼっている。

若者と高齢者のふれあいでお互いの理解を深め、「相手の立場や価値観を認めることがボランティア活動の基本。三世代介護体験の効果は大きい。」と慶応大学社会貢献講座の桜田事務局長も評価している。

高齢者年記念シンポジウム「高齢者の自立を考える」を5月27日札幌の北海道新聞社ホールで開催する。基調講演者は津川雅彦。沖藤典子（作家）、田中良治（老人専門医）北良治（奈井江町長）ら4人で話し合う。

☆活動のねらい

全国で40万人近いといわれる視覚障害者が生活の基である「自立的で健康的な食生活」をおくることができる環境を整えることによって、障害者が健常者と共生し、社会へ完全参加する「ノーマライゼーションの実現」に資することをめざす。

☆アピールポイント

「視覚障害」は、一面では「情報障害」で、特に日常生活情報が不足している。このため生活の中心である「食」に的を絞って、在宅視覚障害者等を対象として、音声及び点字等による食生活に関する情報の提供と、食環境の改善活動を実施してきている。

1 食生活情報の提供

- * 月間「声の食生活情報」の発行
- * 音声版食品解説「声のアラカルト」の制作
- * 献立ヒントのテレフォンサービスの実施
- * 点字図書・カセットテープ図書等の刊行

2 食環境の改善を推進するための調査・研究活動や、社会一般への普及啓発活動

- * 食品店・外食店におけるサポートシステムに関する調査研究や提唱普及活動
- * 食品等へのアクセス改善のための調査研究
- * 食生活指導者への支援活動
- * 視覚障害者の食生活改善問題についての、アピール活動の実施

☆高齢者年への取組

従前からの視覚障害者の食生活改善ノウハウは、高齢者の食生活の改善にも資する面が多い。したがって、「高齢者の食生活調査」の実施をはじめ、当協会の事業全般にわたり、高齢者の食生活改善と密接に関連づけつつ、その展開を図る。

メロウ・ソサエティ・フォーラム

☆概要

ゆとり豊かで活力のある高齢社会の創造をめざした、通産省の「メロウ（円熟）ソサエティ構想」を支援する団体として、産・学・官の有志により平成2年2月に設立された。

会員企業38、協賛団体40、協賛自治体76により組織されている。

情報技術の活用により、高齢者の積極的な社会活動や就業などを促進する、多様なプロジェクト、事業を行なっている。

<http://www.mictokyo.co.jp/mellow/>

☆アピールポイント

高齢者の方々が常日頃お持ちの以下のような願望は、パソコンやパソコンネットワークを使うことによって容易に実現できる。

- *好奇心を満たしたい
- *向上心を持ちたい
- *世の中の情報を広く手に入れたい
- *仲間を作りたい
- *人に教えたい
- *時流に乗り遅れたくない・・・

高齢者と情報技術の結びつきは、今後ともますます強固なものになってくるものと思われる。

☆高齢者年への取組

来たる3月5日、国際高齢者年の趣旨に沿って「メロウ・シンポジウム 99」を開催する（於：有楽町朝日マリオン）。

「活力ある社会作りに向けて、さまざまな視点からシニアの参画を考える」をテーマに基調講演やパネルディスカッションを行なう予定である。



(福) テレビ朝日福祉文化事業団

☆活動のねらい

当事業団は、民間放送系としては初めての社会福祉法人として設立された。

テレビ朝日は、以前より、交通事故防止・社会福祉キャンペーン「社会福祉大相撲」を毎年秋に開催して、その収益金を交通安全の関係諸団体に寄付してきた。

しかし、さらに幅広い社会福祉活動を行うことをめざして、基金を拠出して昭和52年当事業団を設立した。そのような背景から、老人福祉、心身障害者福祉、児童福祉など、当事業団は広範囲の福祉活動に取り組んで今日に至っている。

☆アピールポイント

*万人に広く文化・娯楽・教養などの情報を提供するのが放送の使命であるが、ハンディのある人々への気配りも、平等の観点から、おろそかにできない。

健常者がさほどの努力なく得られる生きがいや希望を、ハンディのある人々に福祉という形でサポートし、夢のある生活作りに協力することも放送業の使命の一つであろう。

*テレビを視ている多くの方々に福祉をよく理解して頂くためにも、映像メディアの力は大きく、放送の責任は重いものとする。

*テレビ朝日加盟の独自の全国ネットワーク民間放送教育協会では、文部省と生涯教育についての番組を制作しているが、老人福祉などの情報を交換して、今後の活動に役立てていきたい。

☆高齢者年への取組

小さな団体の割に守備範囲が広く、活動が中途半端になりがちである。長年続けてきた老人福祉のイベントが幾つかあるので、気持ちを新たに対応していく。元気なお年寄りが、堂々と一流ホテルで社交ダンスを披露できるような大会が開催できたらと思う。

(財)ダイヤ高齢社会研究財団

☆活動のねらい

三菱グループ29社を賛助会員とする厚生省所管の公益法人。

「幸せで活力ある長寿社会」の構築への支援を目的とした社会貢献事業を行う。

☆アピールポイント

1. 高齢社会における保険・医療・福祉分野の社会的課題を民間の立場から実践的調査研究活動を行い、以て社会に提言する。

* 公的介護保険の施行を踏まえ、ケアマネジメントシステムのありかたについての調査研究(東京町田市・千葉安房郡)

* 企業退職高齢者に関する調査研究

* 三菱グループ企業の退職者をメンバーとする活動:「高齢社会リサーチモニター制度」「ダイヤネットワーク」

2. 意識啓発活動

* 講演会、セミナー等の企画・開催

* 機関誌、各種報告書等の発刊

☆高齢者年への取組

財団活動の充実に加え、高連協関連団体との連携強化を図り、高齢者の活力と高齢社会の大切さを広く社会にアピールする。

今後のイベント企画は次のとおり。

1. 講演会 3月18日 於:全電通ホール

* 「高齢者こそ高齢社会の担い手」
浜田淳 氏(総務庁長官官房参事官)

* 「21世紀の高齢社会をデザインする」
田中滋 氏(慶應義塾大学教授)

2. 国際高齢者年記念シンポジウム

「高連協共同イベント」(案)に参加
(不成立の場合は単独開催)

3. 「高齢社会リサーチモニター」関連行事
(2. 3. は平成11年後期開催)

4. 広報活動

「DIA NEWS」、「ダイヤ財団新書」等に
高齢者年関連の記事等を掲載・発刊。

(財)シニア ルネサンス財団

☆活動のねらい

平成4年6月設立。経済企画庁の所管。

シニア層の持つ豊かな経験や智恵、更に時間の積極的活用と相互協力によって、これから増大する中高年者の「自助自立」を支援することを目的に活動を展開。この活動の担い手がシニアライフアドバイザー(以下SLA)で、その養成と資格付与、活動支援が当財団の主な事業である。

☆アピールポイント

SLAの資格は財団が開催するSLA講座を終了した者に付与される。SLAは、シニア生活全般にわたり相談を受け、適切なアドバイスを与えてシニアの自立を促すことをその役割とし、現在全国で1400名のSLAが活躍中。

例えば全国6か所のシニア電話相談室の他、各種教室・イベントの企画運営や講師を務めたり、パソコン通信・インターネットを通してのシニアのネットワーク形成等、その活動は多岐にわたっている。

昨年3月実施の全国一斉特設電話相談「定年退職前後の悩み110番」では、2日間だけで1409件もの相談が寄せられた。

☆高齢者年への取組

* 「ジェロントロジー講座」の発足

昨年7月、ジェロントロジー(長寿社会の人間学)の最高研究機関の一つである米国の南カリフォルニア大学での研修を実施。その成果をもとに今春、当財団とSLAの協力制作による「ジェロントロジー講座」をスタートさせる。

* 「ジェロントロジーシンポジウム」開催

今年6月、カリフォルニア大学よりジェロントロジー研究所長シュナイダー博士及びジェロントロジースクール校長ピーターソン博士を招聘しシンポジウムを開催する。